

非物質的労働論の提起したもの（2） 価値の生産をめぐって

後藤

1. 労働の変容：

パオロ・ヴィルノ『マルチチュードの文法』「第二章 労働、行動、知性」より

1) アーレントの議論：『人間の条件』

Labor：労働。「人体の生物学的過程に対応する活動性（activity）のことだ。その自発的成長、新陳代謝、場合による衰退は、労働が生み出し、生命過程の中で消費される生命上の必然性と結びついている。労働の人的条件は生命そのものである。」飲食や睡眠のような文字通りの生命維持活動。私密的、無世界的、循環的、反復的。世界、他人を必要としないという意味で非政治的。近代以降「肥大」＝私秘性の減退＝社会の成立。

Work：仕事。人間存在の非自然性に対応するもの。すべての自然な環境物とは異なる事物からなる、人工的世界を提供する活動性。仕事の人的条件は世界性である。

Action：活動。物の介在なしに人間同士の間で直接に行われうる唯一の活動性。それは、人間が一人ではなく複数存在していること、その複数性が同時に多数性でもあるということ、同じ人間でありながらも、誰もが全く同じとはいえず少しずつ異なっているという根源的条件にかかわっている。「人間は別に労働しなくても、何とか生きていける。他の人間に、自分たちのために労働するよう強制することができるからだ。また人は、事物の世界に自分自身は何一つ有用な対象を付け加えることなしに事物の世界を使い、楽しむだけにしておくこともできる。搾取屋や奴隷使用者、寄生生活者の生は不正ではあろうが、彼らが人間だということは間違いない。ところが、言論や活動なしの人生というものは・・・世界から見れば文字通り死んだに等しいのである。」

2) ヴィルノ

労働（ないし生産）：自然や、新たな対象の生産や、反復的で予測可能な過程といったものとの有機的な交換を意味する。アーレントの労働と仕事を結合。一つの独立した対象（完成品）へと至る。

政治的行動：労働とは異なり、社会的諸関係に介入する。自然の素材に介入するわけではない。従って、政治的行動は可能的なものや予測不可能なものに関わるものであり、また、自らが働く場としてのコンテクストをさらなる対象によって満たすものではなく、むしろこのコンテクスト自体を変容させるもの。政治的行動はまた、公的なものであり、多数的なもの外部性・偶然性・ノイズに委ねられたものであるという意味で、知性とも異なる。「他人の眼差しへの露出」に耐えること（アーレント）。アーレントの「活動」に対応。「完成品」が存在しない。

知性：純粋な知性は、孤立して目に見えないということとその本性とする。思考者の瞑想は他人のまなざしから逃れている。理論的な考察は目に見えるものからなる世界を遮断して行われる。

3) ポストフォーディズムにおける労働と政治の融合。

a) ポストフォーディズム的労働の特徴＝政治的行動の特徴

他人の眼差しへの露出

他人のプレゼンスとの関係

全く新たなプロセスの開始

偶然性・予測不可能なもの・可能的なものとの構成的な親密性

b) 名人芸：ピアニスト・舞踏家・雄弁家・教師・司祭

- ・一つの永続的な作品の中に対象化されることなく、それ自体の中にそれ自体の完成（あるいはそれ自体の目的）を見出す活動
- ・他人のプレゼンスを必要とする活動であり、聴衆＝公衆があつて初めて存在しうるもの
「いかなる作品も実現しないようなタイプの芸術は、政治との強い親和性を持っている」（アーレント）

c) マルクス「直接的生産過程の諸結果」「剰余価値学説史」における分析

- ・「生産者から独立して存在する商品・・・それを書いたり、描いたり、創造したりした者の芸術的な実作業から区別される限りでの、書物、絵画、芸術品一般」を生み出す活動
- ・「生産物が生産する行為と不可分である」ような全ての活動、すなわち、それ自身からはみ出るような作品の中に自らを対象化することなく、それ自体の中にそれ自体の完成を見出すような全ての活動

マルクスは、パフォーマンス的芸術家の活動と奉仕的な職務との間の強力な類似性によって、当惑させられている。

マルクスによれば、名人芸的な労働者たちとは、一方で、量の観点から見ればさほど重要とはいえない例外でしかないような存在。他方で、ほぼ常に奉仕的/非生産的(剰余価値を生産しない)労働の中に収斂する人々のこと(召使による人格的な奉仕)。自律的な完成品が欠けている場においては、概して剰余価値の生産的労働はもはや問題とはならない。マルクスは実際、作品なき労働＝人格的な奉仕という等式を強調している。

*機械制大工業が支配的生産様式であったマルクスの時代的制約

- d) ポストフォーディズムにおいては、剰余価値を生産するものは、ピアニストや舞踏家、政治家のように振舞う。労働は、「公的構造を備えた空間」(聴衆)を必要としており、また、作品を欠いた名人芸的なパフォーマンスに似ることになる。このような公的構造を備えた空間をマルクスは「協働」と呼んでいる。社会的生産力がある一定の水準まで発展すると、労働的協働は、言葉でのコミュニケーションを自らのうちに取り込み、その結果、政治的行動の一つの複合体に似てくる。

e) 文化産業

「農民は第一次産業に、工場労働者は第二次産業に属している。一方は何もないところから生産し、他方は一つのを別のものに変える。農民の場合でも、工場労働者の場合でも、その評価尺度は簡単なものだ。量的なのだから。つまり、あの工場は一時間にこれほどの部品を量産するとか、あの農場は効率よく作物を生産するとか。でも、俺たちの仕事はそうはいかない。量的な価値尺度がないのだ。司祭や広告業者やPRマンの腕前は どうやって評価されるのか。やつらは、何もないところから生産するわけでも、物の形を変える訳でもない。やつらは、・・・生産装置ではないし、ベルトコンベアでもない。よくて、潤滑油であり、純粋なワセリンに過ぎない。・・・やつらが信仰やら、購買意欲やら、シンパシーやらをうまい具合に高めたとしたら、いったいその量は どうやって計れるのか。俺たちに尺度なんかない。」ルチャーノ・ビアンチャルディ『辛酸な生活』よりの引用。

文化産業においても(ポストフォーディズムの時代では、産業一般において)、生産過程の終わりで売りさばくべき完成品がないわけではない。しかし、諸対象の物質的生産はオートメーション化された機械システムに任されるものであるのに対し、生きた労働の実作業は言語活動的-名人芸的なそれに漸進的に近づいていく。

e) 文化産業の特徴

- ・フランクフルト学派『啓蒙の弁証法』による分析

「魂の工場」(出版、映画、ラジオ、テレビなど)ですら、直列性と細分化というフォーディズム的基準に合致している。資本主義は・・・精神的生産でさえも機械化し細分化できること

を示した。直列性、各々の職務の無意味さ、情動と感情の計量経済学。

他方、文化産業という特殊なケースにおいては、労働過程のフォーディズム的組織化への完全な同化に必ずしも関わらない幾つかの局面が残されていることも認めてはいる。文化産業においては、ある特定の空間を、無定形（インフォーマル）なものに、プログラムされていないものに、予測不可能なものゆらめきに、コミュニケーション上の心象形成の即興に、開いておくことも必要だった。ただし、人間の創造性を促進するためではなく、企業が十分な生産を獲得できるようにするため。だが、フランクフルト学派にとって、これらの局面は、影響力のない残余、過去の残滓、ゴミくずでしかない。

- ・今日のポストフォーディズム時代において、コミュニケーション的行動の無定形性、会議に典型的な競争的相互行為、テレビ番組を活気付けるような突飛な変化、要するに、ある一定の閾値以上になると定着させることも統御することもできなかつたとされる全てのものが、社会的生産全体の典型的特長となった。

4) スペクタクル

ギー・ドゥボールにとって、「スペクタクル」とは、商品と化した人間のコミュニケーションのこと。人間のコミュニケーションは、スペクタクルという資格において、数ある商品のひとつであり、特別な質や特権を奪われている。しかし他方で、ある時点から、全ての産業分野に関わる商品ともなった。問題の核心はここにある。

スペクタクルは、一方で、一つの特異な産業—まさに文化産業と呼ばれる産業—に特別な商品だということができる。他方で、ポストフォーディズムにおいては、人間のコミュニケーションは、生産的協働一般の本質的な原材料となつてもいる。したがって、ポストフォーディズムにおける人間のコミュニケーションは、生産力の花形であり、自分自身の分野の領域を超え、むしろ、産業全体—生産全体—に関わっているようなものなのだ。スペクタクルにおいては、社会で最も重要な生産力—現代のあらゆる労働過程に必然的に関わらざるを得ない生産力—が、物神化された一つの独立した形式のもとに露呈しているというわけである。例えば、言語活動能力、知、想像力など。スペクタクルは、したがって、二重の本性を持っているといえる。すなわち、スペクタクルはある特別な産業の特異な生産品であると同時に、ひとつの生産様式全体の真髄でもある。

貨幣が、確定した作品や労働の過去に関連するような「実在的抽象」であるとすれば、スペクタクルのほうは、ドゥボールに従えば、反対に作品を作ることそれ自体—あるいは労働の現在—を描くような「実在的抽象」なのだ。スペクタクルは、準備中の—すなわち、生成途中の状態あるいはポテンシャルティの状態にある—生産過程に関わるもの、人々によって行われる可能性のあるものを示す。貨幣は自らのうちに諸商品の価値—したがって、社会がすでに行ったこと—を反映させるが、スペクタクルは、社会の総体がそうなる可能性のあるものと、社会の総体によって行われる可能性のあるものとを、独立した形式において提示する。貨幣が交換に向かう一方で、スペクタクルすなわち商品化した人間のコミュニケーションは、いわば生産的協働へと向かうのだ。

コミュニケーション産業（あるいはむしろスペクタクル産業、あるいはさらに文化産業）は数多くある産業のうちの一つであり、特殊な諸技術や、特別な慣例や、固有の利益を有しているが、また別の面で、コミュニケーション産業は、生産手段の産業という役割を果たしてもいるのではないか。

*機械、パソコンによってコントロールされた生産過程における抽象的人間労働の実在

*非物質的労働が支配的な生産過程における、ますます差異のない、抽象的人間労働の実在

5) 社会的協働

労働的職務において、行動の完遂が行動そのものの内部に見出される（すなわち、独立した半製

品をもたらさない) ケースが増えてきている。マルクスは『要綱』の中で、大産業がオートメーション化され、自然科学が生産過程へと集中的かつ徹底的に適用されることによって、労働活動が「直接的生産過程の主作用因であることをやめ、そうした生産過程の傍らに位置づけられることになる」、このことは労働が「監視活動や調整活動」に漸進的に一致していくということを意味していると述べている。言い換えれば、工場労働者あるいは事務労働者の職務は、ある一つの特別な目的を達成することにはもはやなく、むしろ、社会的協働を多様化させ強化させることにあるということである。

社会的協働の二つの理解。

「客観的理解」：全ての個人がそれぞれに異なる特殊な事柄を行い、そうした事柄が今度はエンジニア、あるいは工場長によって互いに関係付けられるという考え方。この場合、協働は諸個人の活動を超越するものであり、諸個人による具体的な仕事には重きがおかれぬ。

「主観的理解」：個人的労働の大部分が、協働そのものを発展させ、洗練させ、強化することに存するような場合。ポストフォードイズムではこの理解が支配的。

「労働者の情報を盗むこと」が資本主義企業の一つの資源であった。労働者たちがより楽に労働を遂行する手段を見出し、余分に休憩しうるようになったりするたびに、企業のヒエラルキーは、たとえそれが認知的なものに過ぎなくとも、この小さな獲得を搾取し、すかさず労働の組織を変更してきた。

重要な変化が起こるのは、労働組織を改善する方策や「コツ」や解決策などを見出すことが、ある意味で、工場労働者あるいは事務労働者の職務となるときである。この場合、労働者の情報がこっそりと使用されるということはなく、むしろ、それはあからさまに必要とされる。労働者の情報が、労働者の任務の一つになっている。

*QC サークルの組織化

この同じ変化が協働についても起こる。労働者が事実上技術者によって調整されている場合と、新たな協働的慣例を開発し生産することが労働者に求められている場合とでは、事態は同じではない。協力して行動すること、すなわち言語活動による相互行為は、もはや背景にはとどまらず、前面に躍り出てくる。

主観的な協働が主たる労働力になると、労働的行動は、その言語活動的・コミュニケーション的本性を明確に示し、また他人の眼差しへの露出を当然のこととして伴うものとなる。労働の独白的な性質が姿を消すことになる。他人との関係は、その根源的で基本的な要素となり、もはや二次的なものではない。労働が直接的生産過程の構成要素であることをやめ、むしろその傍らに現れる場合、生産的協働は「公的構造を備えた空間」になるのだ。

「トータルクオリティ」をめぐる言説は、(政治的) 行動に対する傾向や、可能的なものや予測不可能なものに対峙する才能や、新たな何かを始める能力といったものを生産の自由裁量に委ねることを意味する。

*昨今の労働市場に求められるの力としての「人間力」の強調

7) 一般的知性

思考が富の生産の主動力となる。思考は、生産過程になだれこむことで、目に見えない活動であることをやめ、むしろ生産過程にとって外在的な何かあるいは「公的な」何かとなる。多様な領域(純粋な思考、政治生活、そして労働)の間の交配が始まるのは、知性が主たる生産力として公的なものとなるときである。

General intellect : 一般的知性とは、精神的抽象が、直接的に、それ自体で、実在的抽象になるというような段階。

マルクスは一般的知性を客観的な科学的能力あるいは機械システムとして着想している。一般的

知性が一機械システムにおいて具現化される（あるいはむしろ推論される）代わりに一生きて労働の属性として存在するような側面も考察すべき。一般的知性は今日ではなによりもまず生きて諸主体によるコミュニケーション・抽象力・自己反省としてその姿を現す。一般的知性の一部が、固定資本の中に凝固することなく、むしろ、コミュニケーション的相互行為において、幾つかの認識的パラダイム—対話的パフォーマンスや言語ゲーム—の形を取って展開するということが、そうしたことが経済発展の論理そのものにとって必要なものとなっている。あるいは、公的な知性は、協働と、生きて労働の協力して行動することと、あるいは諸個人のコミュニケーション能力と一体化している。

一般的知性を類によって獲得された諸知識の総体だと理解してはならない。一般的知性はむしろ、思考する能力であり、力能＝可能態そのもののことであって、そうした力能＝可能態の無数の特殊な実在化のことでない。一般的知性は、今日、賃金労働の永続化、ヒエラルキー体系、剰余価値生産を担う枢軸としてその姿を現している。

生産過程の諸関係が諸職務の技術的かつヒエラルキー的分割に基づいているのに対し、一般的知性に立脚する協力して行動することのほうは、共有的な分配から出発して「精神の生活」へと向かう。すなわち、コミュニケーション的・認知的性向の事前の分有から出発する。しかしながら知性によるおの超過協働は、資本主義的生産の強制力を無にするものではなく、むしろ、資本主義的生産のこのうえなく優れた資源として姿を見せている。協働のこの異質性には声もなければ姿もない。このように、知性の出現が労働の技術的な事前要件となるために、それが労働外で喚起する協力して行動することのほうも、工場的体制を特徴づけるもろもろの評価基準そしてヒエラルキーに従うものになるのである。

「自然は機械を作らないし、機関車、鉄道、電信、ミュール自動紡績機、等々を作らない。それらは人間の勤労[Industrie]の産物であり、天然の材料が、自然を支配する人間の意志の器官に、あるいは自然における人間の意志の実証の器官に転化されたものである。それらは、人間の手で創造された、人間の頭脳の器官であり、対象化された知力である。固定資本の発展は、どの程度まで一般的社会的知能、知識が、直接的な生産力になっているか、だからまた、どの程度まで社会的生活過程の諸条件それ自体が、一般的知性の制御のもとに入り、この知性にもとづいて改造されているかを示している。[それは]どの程度まで社会的生産力が、知識という形態においてのみではなく、社会的実践の、実在的生活過程の直接的器官として生産されているか、[を示している]。」経済学批判要綱第二分冊 492 頁

2. 価値尺度の変容

同「第四章 マルチチュードとポストフォードイズムの資本主義についての 10 のテーゼ」
およびマルクス『経済学批判要綱』機械についての断章より

1) 単に抽象的に活動しているということだけに限られている労働者の活動

「機械は、どの点から見ても、個々の労働者の労働手段としては現れない。機械の種差は、労働手段の場合とは違って、客体に対する労働者の活動を媒介することでは決してないのであり、むしろ労働者のこの活動のほうが、もはや機械の労働を、つまり原料に対する機械の作用を媒介する—監視し、機械の故障を防止する—に過ぎないものとして措定されているのである。用具の場合には、労働者が、器官としてのこれに、自分自身の熟練と活動とをもって魂を吹き込むのであり、だからまた、その取り扱いが彼の名人芸に依存するのであるが、これとは違って、労働者に代わって熟練と力を持っている機械は、それ自身が名人であって、自己の中で作用する機械的諸法則のかたちで自分自身の魂を持っており、そして労働者が食糧を消費するように、自己の不断の自己運動のた

めに、石炭、油、等々（用具財）を消費するのである。単に抽象的に活動しているということだけに限られている労働者の活動は、あらゆる側面から見て、機械装置の運動によって規定され規制されているのであって、その逆ではない。科学は、魂を持たない機械装置の手足に、これらの構造を通じて、合目的的に自動装置として作用することを強制するのであるが、この科学は、労働者の意識のうちには存在するのではなく、機械を通じて、他者の[疎遠な]力として、機械そのものの力として、労働者に作用する。資本の概念のうちにある、対象化された労働による生きた労働の取得—それ自体として存在する価値による価値増殖的な力または活動の取得—は、機械装置に立脚する生産では、生産過程そのものの性格として—その素材的諸要素およびそれに素材的運動からも—措定されているのである。生産過程は、過程を支配する統一としての労働が過程を統括している、という意味での労働過程であることをやめてしまった。労働はむしろ、ただ、意識ある器官として、機械体系（システム）の多くの点に個々の生きた労働者のかたちで散りばめられて現れているにすぎない。」
『経済学批判要綱』第二分冊 475—477 頁

2) 個々の労働能力の価値増殖的な力は無限に小さなものとして消えうせる

「機械装置に対象化された価値は前提として、すなわち、それに比べれば個々の労働能力の価値増殖的な力は、無限に小さなものとして消えうせるような前提として現れるのであり、機械装置と共に措定されている膨大な量の生産によって、生産物からもまた、生産者の直接的欲求に対する、だからまた直接的使用価値に対する、いっさいの関連が消えうせるのであり、生産物が生産されるさいの生産の形態と生産物が生産されるときに諸関係とのうちにすでに、生産物はただ価値の担い手として、またその使用価値はただ価値のための条件として生産されているだけだ、ということが措定されているのである。」同 475 頁～477 頁

3) 一般的社会的労働（＝抽象的人間労働の基盤）が自己を表すのは、（固定）資本において

機械装置が社会的な科学の、生産力一般の蓄積とともに発展するという意味では、一般的社会的労働が自己を表すのは、労働者においてではなく、資本においてである。社会の生産力は固定資本で測られており、固定資本として対象的な形態で存在するが、また逆に、資本の生産力は、資本が無償でわがものにするこの一般的進歩と共に発展する。同 479 頁

4) 労働時間を唯一の価値規定的要素としているのは資本自身であり、そのことは自己自身を解体しているに等しい

労働時間が—単なる労働量が—資本によって唯一の価値規定的要素として措定されればされるほど、生産の—使用価値の創造の—規定的原理としての直接的労働とその量とがそれだけ消え失せ、量的にも、それだけ小さい比率に引き下げられると共に、質的にも、不可欠ではあるが下位の契機として、すなわち、一面から見れば一般的科学的労働、自然諸科学の技術学的応用に比べて下位の、また[他面から見れば]総生産の社会的編制から生じる一般的生産力—これは社会的労働の天性として（歴史的産物であるにもかかわらず）現れる—に[比べて]下位の契機として引き下げられる。資本はこのように、生産を支配する形態としての自己自身の解体に従事しているのである。

5) 社会的個人の発展

生きた労働の対象化された労働との交換は、すなわち社会的労働を資本と賃労働との対立という形態で措定することは、価値関係と価値に立脚する生産との究極の発展である。この生産の前提は、富の生産の決定的な要因としての、直接的労働時間の大量、充用される労働の量であり、またどこまでもそうである。ところが、大工業が発展するにつれて、現実的富の創造は、労働時間と充用された労働の量とに依存することがますます少なくなり、むしろ労働時間の間に運動させられる諸

作用因の力に依存するようになる。そして、これらの作用因—それらの強力な効果—それ自体がこれまた、それらの生産に要する直接的労働時間には比例せず、むしろ科学の一般的状態と技術学の進歩とに、あるいは科学の生産への応用に依存している。(この科学の、とりわけ自然科学の発展、またそれとともに他のあらゆる科学の発展は、それ自身がこれはまたこれで、物質的生産の発展に比例する。)たとえば農業は、社会体全体にとって最も有利に制御されるべき物質的素材変換に関する科学の単なる応用となる。現実の富の姿は、むしろ、充用される労働時間とこれの生産物の間の途方もない不比例のなかに、また同じく、「いっさいの具体性を奪われて」全くの抽象にまで還元された労働とこの労働が監視している生産過程の猛威 (Gewalt)とのあいだの質的な不比例のなかに、はっきり現れる—そしてこのことを暴露するのが大工業である—。もはや、労働が生産過程の中に内包されたものとして現れるというよりは、むしろ人間が生産過程それ自体に対して監視者ならびに規制者として関わるようになる。(機械装置に妥当することは、同様に、人間の活動の結合と人間の交通の発展についても妥当する。)もはや労働者は、変形された自然対象を、客体と自分とのあいだに媒介項として割り込ませるのではなく、彼は、彼が産業的な過程に変換する自然過程を、自分と自分が思うままに操る非有機的自然とのあいだに手段として押し込むのである。労働者は、生産過程の主作用因であることをやめ、生産過程と並んで現れる。この変換の中で、生産と富との大黒柱として現れるのは、人間自身が行う直接的労働でも、彼が労働する時間でもなくて、彼自身の一般的生産力の取得、自然に対する彼の理解、そして社会体としての彼の定在を通じての自然の支配、一言で言えば社会的個人の発展である。現在の富が立脚する、他人の労働時間の盗みは、新たに発展した、大工業それ自身によって創造されたこの基礎に比べれば、みすばらしい基礎に見える。直接的形態における労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は富の尺度であることを、だからまた交換価値は使用価値の[尺度]であることを、やめるし、またやめざるをえない。大衆の剰余労働はすでに一般的富の発展のための条件であることをやめてしまったし、同様にまた、少数者の非労働は人間の頭脳の一般的諸力の発展のための条件であることをやめてしまった。それとともに交換価値を土台とする生産は崩壊し、直接的な物質的生産過程それ自体から、窮迫性と対抗性という形態が剥ぎ取られる。諸個人の自由な発展、だからまた、剰余労働を生み出すために必要労働時間を縮減することではなくて、そもそも社会の必要労働の最小限への縮減。その場合、この縮減には、全ての個人のために自由になった時間と創造された手段とによる、諸個人の芸術的、科学的、等々の発展開花が対応する。資本は、それ自身が、過程を進行しつつある矛盾である。すなわちそれは、[一方では]労働時間を最小限に縮減しようと努めながら、他方では労働時間を富の唯一の尺度かつ源泉として措定する、という矛盾である。だからこそ資本は、労働時間を過剰労働時間の形態で増加させるために、それを必要労働時間の形態で減少させるのであり、だからこそ資本は、過剰労働時間を、ますます大規模に必要な労働時間のための条件—死活問題—として措定するのである。だから、一面から見れば資本は、富の創造をそれに充用された労働時間から独立した(相対的に)ものにするために、科学と自然との、また社会的結合と社会的交通との、いっさいの力を呼び起こす。他面から見れば資本は、すでに創造された価値を価値として維持するために、そのようにして創造されたこれらの巨大な社会力を労働時間で測って、これらの力を、必要とされる限界のうちに封じ込めようとする。生産諸力と社会的諸連関とは—どちらも社会的個人の発展の異なった側面であるが—、資本にとっては単に手段として現れるにすぎず、また資本にとっては単にその局限された基礎から発して生産を行うための手段に過ぎない。ところがじつは、それらは、この局限された基礎を爆破するための物質的条件なのである。「12 時間のかわりに 6 時間の労働がなされるとき、一国民は真に豊かである。富とは剰余労働時間 (実在的富) への指揮権ではなく、全ての個人と全社会のための、直接的生産に使用される時間以外の、自由に処分できる時間である。」同上 489 頁~491 頁

6) 労働時間と非労働時間との質的な差異の消失

フォーディズムにおいては、グラムシによれば、知性は生産の外にあった。労働が終わったときに初めて、フォーディズム的工場労働者は新聞を読んだり、党の集会に参加したり、思考したり、会話をしたりすることができた。反対に、ポストフォーディズムにあっては、「精神の生活」が生産の時間-空間の中に完全に含まれることとなり、一つの本質的な均質性が支配的なものとなる。

労働と非労働は、人間の類的能力-言語活動、記憶力、社会性、倫理的および美学的傾向、抽象能力と学習能力-の実践に基づいたひとつの同じ生産性を発展させることになる。「労働」と「非労働」との間の古き区別は、報酬のある生活と無報酬の生活との間の区別に集約される。「どんなことが」なされるのか、それが「どのように」なされるのかという観点からは、就労と失業の間に、いかなる実体的な差異も見出せない。

労働力が参加する生産的協働は、労働過程によって問題とされる生産的協働に比べると、常に、より幅広く、より豊かなものである。労働力が参加する生産的協働は、非労働をも含んでいるからである。すなわち、工場の外やオフィスのそとで培われた経験や認識をも含んでいるのである。労働力が資本を価値増殖させるのは、労働力が決して自らの非労働的な質（労働力が、厳密な意味での「生産過程」に含まれる生産的協働よりもさらに豊かな生産的協働に関っているということ）を失わないからである。

決定的な点は、労働の外で培われた経験が労働の中で非常に大きな比重を持つということの再認識である。

7) 「労働時間」とそれよりも幅の広い「生産時間」との間の恒常的な開き

農業：種まき（労働時間）、種が成長するための長い間隔（生産時間は続くが、労働時間ではない）、最後に収穫（もう一度労働時間）

工場労働者が監視し調整（労働時間）、オートメーション化された機械システム（生産時間）。ポストフォーディズム的環境では、生産時間が労働時間によって中断されることはめったに起きない。

ポストフォーディズムにおける「生産時間」は非労働時間を含みこんでいる。すなわち、非労働時間に根ざした社会的協働を含みこんでいる。したがって、私たちが「生産時間」と呼んでいるものは、報酬のある生活と無報酬の生活とからなる、労働と非労働からなる、さらにはまた水面上の社会的協働と水面下の社会的協働（労働活動と完全に同質でありながらも生産力としては算定されない人間活動の一部）とからなる分ちがたい統一のことである。「労働時間」はこのような意味での「生産時間」における一最も重要なものであるとは限らない一つの構成要素に過ぎない。

剰余価値は、何よりもまず、労働時間として算定されない一つの生産時間と厳密な意味での労働時間との間の隔たりによって決定されている。労働時間の中の開き、すなわち必要労働と剰余労働とのあいだの開きだけが重要なのではなく、生産時間（自らのうちに非労働、あるいは非労働に特有の生産性を含むもの）と労働時間との間開きもまた（より）重要。

8) 「単純な」労働に還元不可能な大衆知力

専門家ではない。「人間の身体のうち存在している肉体的・精神的性向すべての総体」としての労働力（マルクス）のこと。大衆知力における特徴的な諸側面は、すなわち大衆知力のアイデンティティは、労働との関係のなかではなく、何よりもまず、生活諸形式の平面において、文化的消費の平面において、言語活動的慣習の平面において、見出されるものである。

大衆知力とは、その全体において、「複雑な」労働であるが、ただし「単純な」労働に還元不可能な「複雑な」労働である。複雑性、還元不可能性は、この労働力がそれに固有の諸職務の遂行において、類としての人間のさまざまな言語的・認知的能力を動員することに由来している。こうした能力によって、各自の作業は、まったく専門家的にならずとも、常に高度な社会性や知性を印

している。「単純な」労働に還元不可能なものとは、言わば、大衆知力によって実行される具体的なオペレーションの協働性のことである。

3. <共>

1) 非物質的労働の支配的傾向

20世紀末の数十年間に、工業労働者はその主導権を失い、代わりに主導権を握ったのは、「非物質的労働」だった。非物質的労働とは、知識や情報、コミュニケーション、関係性、情緒的反応といった非物質的な生産物を創り出す労働である。中略。まず最初に、非物質的労働には二つの基本的な形態があるという点を押さえておこう。第一の形態は、問題解決や象徴的・分析的な作業、そして言語的表現といった、主として知的ないしは言語的な労働を示す。この種の非物質的労働はアイデアやシンボル、コード、テキスト、言語的形象、イメージその他の生産物を生み出す。

非物質的生産のもう一つの主要な形態は、「情動労働」と私たちが呼ぶものである。心的現象である感情とは異なり、情動とは精神と身体の両方に等しく関連する。喜びや悲しみといった情動は、一定の思考の様態と一定の身体の状態をともに表現することで、人間という有機体全体の現在の生の状態を明らかにするのだ。したがって情動労働とは、安心感や幸福感、満足、興奮、情熱といった情動を生み出したり操作したりする労働を指す。具体的には弁護士補助員やフライトアテンダント、ファーストフード店の店員（笑顔でのサービス）といった仕事に、情動労働を見出すことができる。少なくとも支配諸国において情動労働の重要性が増していることは、たとえば雇用者が被雇用者に対して、教育や好ましい態度、性格、「向社会的」行動を主要なスキルとして強調し、それらを身につけるよう要求する傾向に表れている。好ましい態度と社会的なスキルを身につけた労働者とは、情動労働に熟達した労働者と同義なのである。

非物質的労働を伴う実際の仕事には、ほとんどの場合、この両方の形態が混在している。たとえばコミュニケーションの創造に関わる仕事は明らかに言語的で知的な作業であると同時に、コミュニケーションしあう当事者同士の関係には必然的に情動的要素が含まれる。ハート/ネグリ マルチチュード 185 頁。

2) 非物質的労働の<共>性

非物質的労働が他と違うのは、生産物それ自体が多くの方で、ただちに社会的で<共>的なものとなるということだ。車やタイプライターを生産することとは違って、コミュニケーションや情動的关系、知識を生産することは、私たちが共有するものの領域を直接的に拡大することにつながるからである。

「<共>になる」ことは、労働内部の質的な分裂を縮減するものであり、それはマルチチュードの生政治的条件となる。同上 193 頁

3) <共>の生産

私たちの行うコミュニケーションや共同作業や協働は、<共>を基盤にしているだけでなく、それ自体も<共>を生み出す。したがって両者の関係性は螺旋状に拡大していくのである。

こうした<共>の生産は、いかにそれがローカルな領域に限定されたものであろうと、現在のあらゆる社会的生産形態の中心をなしつつあり、また現に、今日新たに支配的となった労働形態の主要な特徴となっている。言い換えれば、労働そのものが経済の変容を通して、協働とコミュニケーションのネットワークを創り出し、またそこに組み入れられているのだ。情報や知識を相手に仕事をする者は誰も、たとえば種子の特性を開発する農業専門家からソフトウェアのプログラマーにいたるまで、他者から伝えられた<共>的知識に依拠しつつ、また新たな<共>的知識を創り出す。このことはとりわけ、アイデアやイメージ、情動、関係性といったものを含む非物質的なプロジェクトを創出する全ての労働にあてはまる。私たちはこの新たに支配的となったモデルを、ただ単にそれが厳密に経済的な意味での有形財の生産にかかわるだけでなく、あらゆる社会的生の経済

的・文化的・政治的な全側面にかかわり、またそれらを生産するものであるという点を強調するために、「生政治的生産」と呼ぶことにする。この生政治的生産とそれによる〈共〉の拡大は、今日のグローバル民主主義の可能性を支える強力な支柱のひとつとなるものだ。同上 22 頁

4. 搾取＝資本による〈共〉の捕獲

1) 生産される〈共〉は資本の外側に形成される

ここで私たちが把握すべき非物質的生産のパラダイムのもっとも重要な側面は、非物質的生産と協働・共同作業・コミュニケーションとの密接な関係—端的に言えば、非物質的生産の基盤が〈共〉にあるということだ。マルクスの主張によれば、歴史的に見た資本の最大の進歩的要素の一つは、大勢の労働者を協働的な生産関係の中で組織することだという。たとえば資本家は労働者を工場に集め、互いに協働しコミュニケーションしあいながら生産に携わるよう指示し、そのための手段を与える。これにたいして非物質的生産のパラダイムでは、労働そのものが生産のための相互作用やコミュニケーション、協働を直接生み出す傾向がある。情動労働は常に直接的に関係性を構築する。アイデアやイメージ、知識の生産は共同で行われるだけでなく（思考とは本来、単独でなされるものではない—どんな思考も過去や現在の他社の思考との共同作業によって生み出されるのだ）、新たに生まれたアイデアやイメージの各々がさらに新しい共同作業を引き寄せ、それを指導させるのである。そして言語の生産は、自然言語であれ、コンピュータ言語やさまざまな種類のコードなどの人工言語であれ、常に協働的であり、常に新たな共同作業の手段を創り出す。このように非物質的労働において協働の創出は労働の内側にあり、したがって資本の外側にあるものとなったのである。同上 243 頁

2) 外部効果（外部経済）

・・・その人自身が行動しなくても得られる利益はプラスの外部効化であり、例えば隣人が庭や家をリフォームしてきれいになると自分の家の不動産価値もそれに伴って上昇する。・・・プラスの外部効果とは直接的生産過程外部で創出される社会的富のことであり、資本はその価値を部分的にしか捕獲することができない。非物質的生産によって生じる社会的知識や関係性、コミュニケーションの形態などは通常このカテゴリーに当てはまる。それらは社会にとって〈共〉的なものとなるにしたいが、一種の原材料—生産において消費される原材料ではなく、使用することによっていっそう増大する原材料となる。244 頁

企業は教育システムや道路、鉄道、電話、光ファイバーなど公共および民間のインフラからだけでなく、その地域の住民全体の文化的発展からも利益を得ている。これらの住民の持つ知性や情動的スキル、技術的知識などは、ビジネスの視点から見ればプラスの外部効果となるのだ。資本は自分の外側にあるこうした富の源泉に対して代価を支払う必要はないが、同時にそれを完全にコントロールすることもできない。私たち全てにとって共通のこうした外部効果は、経済的生産全体をますます大きく規定しつつある。244 頁

これらは伝統的価値尺度では計測できない。計算方法の画期的な変革が必要。

3) 搾取

搾取とは、〈共〉として生産された価値の一部または全体が私的に領有されることを指す。生産された関係性やコミュニケーションはその本性からして〈共〉であるにもかかわらず、資本はその富の一部を私的に領有しようとする。同上 248 頁

5. 社会的協働の編成と価値：NGO の活動を考える

1) 非物質的労働としての NGO 活動

関係性＝ネットワークの創出

知識・ブランド・イメージ・ライフスタイルの生産と共有：抽象的人間労働

社会的生の生産

他方で、金と知識の持つ権力性とその非対称性：先進国と途上国、スタッフと住民

『知性』によって開かれた『公的構造を備えた空間』が最初から繰り返し労働的協働に一すなわちヒエラルキー関係の目の細かいネットワークに一還元されているため、すべての具体的な生産作業において「他人のプレゼンス」の決定的機能は人格的従属関係の形式を取ることになる。「生産物が生産する行為と不可分である」ばあいには、この生産する行為は、それを完遂する者の人格を問題とし、またとりわけこの人格とそれを命令した者の人格との関係を問題とすることになる。＜共有のもの＞一すなわち知性と言語活動一が労働のもとへと置かれることによって、一方で、諸職務の技術的かつ非人間的な分割が虚構のものとなり、また他方でこのような共有性が公的領域へと転換されないように、隷属状態の執拗な人格化が誘発される。」ヴィルノ 124 頁

2) 価値の創造か物質的生产（商品に体化された価値）への寄生か

社会的諸関係の生産そのものが価値を持つ、というよりも社会的価値そのものである。

そのことを対象化し得ないような「理論」は、もはや障害物でしかない。

3) 富すなわち価値のブルジョア的理解と共産主義的理解

「ところで、富は一面では物象 *sache* であって、人間が主体として相対するもろもろの物象、物質的生产物のかたちで現実化されている。他面で価値としては、富は、支配を目的とするのではなくて私的享楽等々を目的とする、他人の労働に対する単なる指揮権である。あらゆる[社会]形態において、富は、物象であれ、物象によって媒介された関係であれ、個人の外部に、また偶然的に個人と並んで、存在する物的な *dinglich* 姿態をとって現れる。そこで、いかに偏狭な民族的、宗教的、政治的規定を受けていようとも、人間がつねに生産の目的として現れている古代の考え方は、生産が人間の目的として現れ、富が生産の目的として現れている近代世界に対比すれば、はるかに高尚なものであるように思われるのである。しかし、実際には、偏狭なブルジョア的形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によって作り出される、諸個人の諸欲求、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであるろう？富は、自然諸力に対する、すなわち、いわゆる自然が持つ諸力、ならびに、人間自身の自然が持つ諸力に対する、人間の支配の十全な発展でなくてなんであるろう？富は、先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に表出することでなくてなんであるろう？そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？そこでは人間は、何か既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にあるのではないのか？」（要綱第二分冊 137-138 頁）

参考文献

- ・カール・マルクス『経済学批判要綱』（『マルクス資本論草稿集 1857-58年の経済学草稿』第一、第二分冊）、大月書店
- ・パオロ・ヴィルノ『マルチチュードの文法』、月曜社
- ・アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート『マルチチュード』上・下、NHK ブックス
- ・金森修『<生政治>の哲学』、ミネルヴァ書房